



Title	精神障害者当事者の経験に着目した質的研究に関する批判的検討：障害者臨床心理学の着想
Author(s)	松田, 康子
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 132, 149-165
Issue Date	2018-08-30
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.132.149
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71480
Type	departmental bulletin paper
File Information	100-1882-1669-132.pdf



精神障害者当事者の経験に着目した質的研究に関する 批判的検討

－障害者臨床心理学の着想－

松 田 康 子*

1. 問題意識
 2. 研究目的と方法
 3. 精神障害者当事者の経験に着目した質的研究レビュー
 4. 拙著の批判的検討と近年において注目すべき研究の動向
 5. 当事者の経験に着目した質的研究を再構築するために
- 【キーワード】精神障害 当事者 質的研究 批判的検討

1. 問題意識

大学院生時代、筆者はERPをはじめとする脳波研究や実験的アプローチを研究手法とする研究室に所属していた。一方、筆者が目指していたのは、精神障害者当事者の経験を聴きとる質的研究であった。精神障害者当事者から紡がれる言葉の価値が学術界では軽んじられていた時代であり、質的研究とは何を指す研究方法なのかという理論武装からはじめなければならぬ時代でもあった。聴きとった研究データの内容について吟味したくても叶わず、そこにたどり着く前の研究方法の課題に対して論戦を張らねばならないこともしばしばだった。

その後、質的研究が学術界にも受け入れられていく経過をたどるなか、大学に赴任し研究と教育に携わることになった筆者もまた、指導学生や他の教員が指導する学生が質的研究を取り入れていくのを経験していった。

今でも忘れられない光景がある。

学生がまとめ上げた研究論文をプレゼンテーションする場に、研究協力をした精神障害者当事者が参加したときのことである。質疑応答の時間になったとき、全く予想だにせぬことが起きた。研究協力者がすうっと手を挙げ、「話を聞いてくれてありがとう」と発言したのである。忘れられない記憶となったのは、この後の聴衆の反応であった。硬い表情のままこの件に関して口を閉ざすもの、直接、筆者に不快感を示すものもいた。筆者はいまだにこの聴衆の反応の真意がわからずにいる。

このわだかまりは、様々な当事者や親や支援者を研究協力者にした質的研究が目の前に積み重なっていくなかで疼き続けた。あるときは、研究協力者である当事者を踏み台にして学位を

* 北海道大学教育学研究院・教授
DOI : 10.14943/b.edu.132.149

取るだけ、単位を得るだけ、業績を得るだけなのではないのかと思うこともあった。「当事者の目線に立って」、「当事者のため」と謳われていても、あえてそう前置きすることに傲慢さを感じたり、なぜ、当事者が研究者の設定した研究目的にしたがって協力しなければならないのか、一体、研究協力する側にはどんな利益がもたらされるのだろうかという疑問が募り、論文指導においても自らの研究着手においても臆病になった。「研究上の問い」は後付けで、とにかく当事者の話を聞くことが目的化しているかのように見えてしまうこともありやるせなかった。当事者を対象にした研究には、略奪や搾取をしてやしないかといったリスクへの感度を常に保っていなければならない。しかし、研究協力者である当事者への敬意や尊重は、研究倫理が強く求められる時代になるにつれ合理的に処理され、倫理申請の承認を手中に納めるのと同時に、皮肉にも返って置き去りにされていくようにも感じられた。

量的研究が発展を続け分析ツールも進化をしているのと同様に、質的研究においてもソフトの開発を始め分析方法は発展し研究会も増え広がりを見せている。そもそも、研究者が研究者然として当事者の言葉を聴きとらずとも、当事者が自ら発信する手記の発表も相次ぐようになり、現在は当事者研究に見るように当事者が研究にも直接参画するようになった。

果たしてこの間、精神障害者当事者の経験に着目した質的研究は、一体どのように積み重ねられてきたであろうか。先行研究は何に応答し、応答しそびれてきたものがあるとしたら何であろうか。当事者が自身の「声」を持って発信できるようになった今、研究者が「声」を聴きとるという手法は必要なくなっているのかもしれない。批判的検討を行い、今後目指す道を見出したい。何より、研究協力者が「協力してよかった」と心から思える質的研究に向けた構想を描きたい。

2. 研究目的と方法

本論の研究目的は、精神障害者当事者の経験に着目した日本の質的研究の研究経緯を辿り、今後の展望として質的研究が目指す道を模索することにある。方法は文献研究とする。先行研究の批判的検討を通し、その経緯を読み解いていく。日本の質的研究に限定する理由は、日本が抱える特有の精神科医療・精神保健福祉の現状を背景に、要請される研究課題があると推測されるからである。

具体的な研究方法は、データベースCiNiiの検索機能を活用し、検討対象の文献を選び出すこととした。検討対象期間は、2000年から2017年に発表された論文とした。検索用語は「精神＋当事者＋質的研究」、「精神＋当事者＋ライフストーリー」、「精神＋当事者＋ライフヒストリ」、「精神＋当事者＋語り」、「精神＋当事者＋ナラティブ」、「精神＋当事者＋現象学」6組で検索をかけた。ヒットした論文数は合計83本であった（2018年3月5日最終閲覧）。検討対象の文献の選出条件として、これらの論文から、次の条件を満たす論文を除いた。①援助者（支援者）が研究対象の研究。②手記を検討材料にしている研究。③質的研究の意義の検討を研究目的としている研究。④精神障害者当事者以外を対象にして活動成果や教育効果を研究目的としている研究。⑤特集記事及び発表要旨のみの場合。⑥調査研究以外の論文。⑦精神障害、精神疾患以外（ひきこもり・虐待）の当事者の経験を対象にしている研究。

文献検討の途上にて、前述の検察用語では抽出されなかったが、引用されていた文献で目的に沿っていると判断された論文を1本追加し、結果、最終的に重複を除き23本の論文が検討対象として選出された。

3. 精神障害者当事者の経験に着目した質的研究レビュー

選出した検討対象論文の一覧を表1に記す。一覧には、著者・論文題名・発表年・研究目的・分析方法の抜粋に加え、内容検討を行なった結果として、探求レベルと認識論をカテゴリ化して示した。探求レベルのカテゴリは、ディアー（1984, 1979）が上げている「因子探索研究」、「関係探索研究」、「関連検証研究」、「因果仮説検証研究」、「規定検証研究」を適用した。ディアー（1984, 1979, p88-89）は、探索のレベルを、問いと答え（理論）の組み合わせによる階層構造を4段階に示している。「これは何であるか？」という問いに、因子を分離したり命名をしたりする「因子探索研究」があり、「何が起きているのか？」という問いには、因子を関係づけたり、状況を描写・記述したりする「関係探索研究」がある。第3のレベルである「もし、…すれば、何が起こるだろうか？」という問いには、状況における関係や因果を検証する「関連検証研究」・「因果仮説検証研究」があり、第4のレベルには、「…を起こすには、私はどうするか？」という問いには、目標に向けた活動の諸側面のリストを書き上げる「規定検証研究」が挙げられている。探索レベルの分類は、方法や考察までの文脈をたどると判断に迷う論文もあったが、主として研究目的から推論した。

認識論については、「既存」と「生成」という2類型のカテゴリ名で分類した。「既存」とは、明らかにしようとしていることがすでに「ある」、「存在するもの」と認識して研究に着手し記述されている論文である。一方の「生成」は、明らかにしようとしていることは環境側（研究者）との相互作用において生成されていくものと認識して研究に着手し記述されている論文に対して、カテゴリ化した。言い換えれば、前者は静的に、後者は動的に事象を認識している論文といえる。このカテゴリ化は、論文記述内容から筆者が推論をした。具体的な推論方法としては、研究者と研究対象者との相互行為によって生成された結果である旨、言及している論文には、「生成」という認識論に立っているとした。なかには研究者がこういった認識論の上に立っているかについて明確に言及されていない論文もあったが、プロセスを明らかにするいわば動的な事象を捉えようとする研究目的であろうと、プロセスがすでにその人のなかにあることを前提に記述されている場合は、「既存」へ分類した。

検討対象期間に定めた2000年から2017年は、精神障害者当事者運動、精神保健福祉の歴史及び関連領域の研究動向を鑑みて設定した。

精神障害者当事者運動の歴史は古い。桐原（2013）によると1974年に全国「精神病」者集団が結成されており、自然発生的なつながりや学生運動を背景にした組織化から当事者運動が全国的に展開していった歴史があるとの指摘がある。また当事者の手による手記や文献も1960年代から存在する。しかし、精神障害者当事者運動の歴史を概観するとき、研究者は、徹底して当事者の立場に立つ全国「精神病」者集団を研究の射程から外してきたことを桐原（2013）は指摘している。1993年全国精神障害者団体連合会結成を持って、そのスタートとする定説を筆者も教授

表1. 精神障害者当事者を研究対象とした質的データによる研究一覧

著者	年	タイトル	目的	探索レベル	分析方法	認識論
1 田中美恵子	2000a	ある精神障害当事者にとっての病の意味―地域生活を送るNさんのライフヒストリーとその解釈	現在地域生活を送る精神障害・当事者Nさんの人生体験をNさん自身の視点からありのままに記述し、Nさんにとっての病の意味を、その人生を通して理解すること	因子探索研究	解釈学的立場	生成
2 田中美恵子	2000b	ある精神障害当事者にとっての病の意味、Sさんのライフヒストリー―その解釈―スティグマからの自己看護と語り	精神障害・当事者Sさん自身の視点からありのままに記述し、Sさんにとっての病の意味を、その人生を通して理解すること	因子探索研究	解釈学的立場	生成
3 田中美恵子	2002a	ある精神障害・当事者のライフヒストリーとその解釈（第1部）―地域生活を可能とした要因および個人における歴史と病いとの関係―	（安定した生活を勝ち得ている人が）どのように生き抜いてきたのかを個人の具体的な生活史を通して記述そこに地域生活を可能としたどのような要因が潜んでいたのかを明らかにする	関係探索研究	解釈学的立場	生成
4 田中美恵子	2002b	ある精神障害・当事者のライフヒストリーとその解釈（第2部）―病いの意味：自立と自己の存在の意味を求めての闘い―	歴史と病の経験が個人においてどのように絡み合っているのか検討するための資料を得る	関係探索研究	解釈学的立場	生成
5 川岸洋美 市山加奈恵 中田伸代 関口由美子	2002	精神分裂病患者の入院体験から学ぶ看護：当事者の語りを通して	「入院中どのようなニーズを持っているか」を明らかにして求められる看護を考察する	関係探索研究	逐語データをコード化し質的に分析	既存
6 片岡三佳 野島良子 豊田久美子	2003	精神分裂病者が語る入院体験：現象学的アプローチを用いて	分裂病を抱えた人たちにとって入院がどのように体験されているかを、患者の生きられた体験（lived experienced）として記述しそれらの体験の本質的な意味を明らかにすること	関係探索研究	Giorgiの現象学的アプローチ	既存
7 木村真理子	2003	リカヴァリビジョン相互作用モデルと日本のコンシューマナティブの適合性	Jacobsonがويسコンシン州で行なったリカヴァリの要素とリカヴァリ指向のシステム構築に必要とされる枠組みにたがって、日本の当事者によるナラティブの類似性を確認する	関連検証研究	質的分析	既存
8 北村育子	2004	病いの中に意味が割り出されていく過程：精神障害・当事者の語りを通して、構成要素とその構造を明らかにする	統合失調症という病を生きる人々の現在にいたる人生の語りを通して、病の意味が割り出されていく過程に存在する構成要素とその構造を明らかにする	関係探索研究		生成
9 岩本操	2007	長期入院経過の精神障害者の生活ニーズに関する質的研究―当事者へのインタビュー調査からの考察	長期入院を体験した当事者から、入院生活をどのように生き、何を感じ、何を望んでいるのかを聞き取ることで、本人の生活ニーズを探り、必要な支援を検討すること	関係探索研究	事例検討、医学情報について医師の評価を確認	既存
10 斎藤まき子	2007	服薬継続における「自己決定の尊重」と看護：当事者の語りをもとに考える	自己決定により主体的に服薬を継続していくために、看護が求められていることは何か	関係探索研究	KJ法	既存
11 西田美香	2009	精神障害者の就労と地域生活が回復に及ぼす要因：有限会社を運営する当事者に焦点を当てて	地域における就労や地域生活が精神障害者の回復に及ぼす要因について検討	関係探索研究	修正版GTA	既存
12 仲宗根歩沙 富田富士子 田邊真由美	2010	精神疾患患者が入院生活を送る上で心の支えとしているもの―当事者自身の語りから	当事者の主観的な体験から精神疾患患者がどのようなものの心を支えとして入院生活を送っているのかについて明らかにし、今後の精神科看護に役立てたい	関係探索研究	逐語録を作成し、質問項目に沿って重要と思われる内容を抽出しカテゴリー化した	既存
13 松田陽子 船越明子 羽田有紀 服部希恵 田中敬子	2011	精神障がい者が関病体験を語ることにによる自己変容のプロセスと変容に影響を与える要因	精神障がい者が関病体験を語ることによって生じる、自己変容のプロセスを明らかにする	関係探索研究	質的帰納的に行った	既存
14 青木聖久	2011	精神障害者の暮らしと障害年金を受給しやすい社会のあり方：障害年金受給者の語りと実態におけるスティグマの解消に向けた取り組みを通して	「暮らしにおける障害年金の実態」に加えて、「障害年金を受給しやすい社会のあり方」を明らかにすること	関連検証研究	記載なし	既存
15 栄セツコ 清水由香	2012	精神障害当事者が物語る「早期」に関する一考察―前服期における本人の違和感と援助要請行動―	精神障害当事者が精神疾患の診断・治療への対応に混乱した時期に際し、精神科受診に至るまでの経過に関連する要因を検討することによって、早期における支援のあり方を提示する	関係探索研究	逐語録と参与観察の記録からテーマに関する語りの内容を抽出し「精神疾患の診断・治療への対応に混乱した時期」に関連する要因と早期支援のあり方を図式化	既存
16 大江真実 長谷川雅美	2012	セルフヘルプグループに参加しているうつ病者の体験	うつ病者がSHGへの参加により経験している思考や感情の体験を当事者の視点から明らかにする。有効なSHG運営への示唆を導く	関係探索研究	重要な部分を抜粋し、コード化し比較検討	既存
17 田中久子 伊藤真由	2013	中期就業者の「こころの病い」の構図：10事例のインタビューをもとに	社会人が抱える現状問題、個人を支配している考えの特徴を明らかにし、社会保障と個人の両面から困難な状況を生み出す当事者の立場に立った支援の方策を考えていこうとするものである	関係探索研究	ナラティブ・アプローチ	既存
18 渡邊久美 園方弘子	2014	地域生活をおくる精神障害者の自己概念の変容プロセス：自尊心回復グループ認知行動看護療法プログラム参加者へのインタビューから	地域で生活している精神障害者で、自尊心プログラムに参加する当事者を対象に、過去・現在・未来の時間軸の中で自己概念の変容プロセスについて明らかにする	関係探索研究	M-GTA	既存
19 栄セツコ	2014	社会貢献としての病いの語り：精神障害者による福祉教育の「場」に着目して	当事者の語りが一定的教育的効果を得た持た得るグループAの福祉教育実践を題材として、当事者が中学生に向けて生成した語りの内容とその語りが生成される条件を明らかにする	関連検証研究		既存
20 栄セツコ	2016	精神障害当事者の語りがもたらす社会変革の可能性	精神障害当事者の語り部グループ「びあの」の実践事例をもとに、エンパワメント実証における組織的次元の活動（公共の場の語り）の課題から社会変革を目指す政治的次元の活動を組み込む方策を提示すること。「若菜生」へのインタビューから「びあの」の活動における課題の析出とともに、語りの活動が持つ政治的次元のエンパワメントの可能性を提示する。「びあの」の活動を「公共の語り」に汎用し、エンパワメント実践の政治的次元の活動を組み込む方策を考察する	関連検証研究	逐語録とフィールドノーツ、出版物を使用して、「びあの」の活動で満たされなかった内容とそれを補完する現在の活動を対比した	既存
21 磯山和樹 森元隆文 竹田里江 吉野淳一 池田望	2016	精神疾患をもつ人の自己開示内容に関する構構概念：北海道で地域生活を送る当事者を対象とした質的研究	精神疾患を持つ人の自己開示内容に関する構構概念を質的に明らかにする	関係探索研究	質的データ分析法（佐藤）	既存
22 木村貴大	2016	精神障害当事者がピアサポーターになる過程：A氏のライフストーリーから見えてくるもの	精神障害当事者がどのようにしてピアサポーターになったのか	関係探索研究	ライフストーリー法	既存
23 立脇恵子 木村真理子 河村ちひろ	2016	リカバリーの語り：米国精神障害者家族連合会（NAMI）で活動するスタッフ	当事者組織が自身にどのような影響をもたらしてきたのか	関連検証研究	記載なし	既存

* 研究者が立つ認識論によって、研究協力者、調査協力者という表記もあるが、ここでは研究対象という表記で統一させることとする。

してきたが、それは間違いであった。八木（2009）は、精神医療関係者が、多々出版されている市井の当事者の方々の手記にあまり関心を持っていないことを憂い、「手記から学ぶ統合失調症」という著書を2009年に出版している。対象となった文献は、1966年から2007年に当事者または家族によって日本で出版された単行本の手記である。

研究者は、長らく精神障害者当事者の「声」を正面から受けとめ、学ぶことを軽んじてきたのだ。遅ればせながら、研究者が精神障害者当事者の「声」を聴きとり、質的データ分析によって精神障害者当事者の経験に学ぶことを始めたのは、1990年代後半であり原著論文として掲載されるようになったのは、2000年以降であった。

筆者が修士論文で「当事者から学ぶ」という出発点に立ち、精神障害者当事者の主観的体験に着目した論文を記したのは1997年であり（葛西 1997）、その一部を学術誌に発表したのは1999年のことであった（葛西 1999）。しかし葛西（1999）の論文は、当事者のインタビューデータに基づいて、障害認識のカテゴリ名を命名してはいるものの、最終的に量的データに換算し議論を展開しており、当事者の経験そのものを十分吟味する研究には至っていない。のちの2006年に学位論文をもとに出版した拙著は（葛西 2006）、インタビューデータをもとにnarration分析を行ったものであるが、検討は後節に譲ることとする。当時の精神障害者に関する表面的、画一的もしくは一部分的な人間像への反証として、精神障害者を「精神病をかかえる当事者であり、精神病を抱えて生きるという、きわめて重大な業績をなしとげてきている」という視角から研究された論文には未刊行であるが河野（1996）の修士論文「精神障害者の当事者組織の研究―患者会《すみれ会》の实地調査報告」も存在する。本来であれば、ここから文献検討を始めるべきであるが、本論では、多くの読者がアクセスできる研究論文を扱い検討するため、データベースを活用し、最初にヒットした田中（2000a）の論文から検討を開始することとした。

選出した文献の概観を最初に記す。

23本の論文の研究領域は、精神保健・福祉、リハビリテーション、精神科看護分野にまたがる論文であった。論文題目名の年次推移を見ると、精神保健福祉行政の経緯がそのまま研究課題に反映されているのがわかる。

2000年前後から現在に至る精神保健福祉行政の流れとは、日本の精神科医療が抱える特有の課題である長期入院の解消と地域生活への移行を支えていくこと、そのサポート資源として近年ではピア・サポートといった当事者の力に着目していく方針が打ち出されていく変遷をさしている。

1995年に施行された精神保健福祉法は、その後一部改正を1999年、2005年、2013年と重ねるなかで、地域生活への移行をより可能にしていくような改定を重ねてきている。2005年に成立し批判が集中した障害者自立支援法は、2013年障害者総合支援法施行へ移行し、障害者の地域の暮らしを支える法律として現在も効力を持っている。この間に、2004年厚生労働省精神保健福祉対策本部報告では、「精神保健医療福祉の改革ビジョン」にて、「入院医療中心から地域生活中心へ」という精神保健福祉施策の基本的方策を掲げ、2009年の中間地点では今後の精神保健医療福祉のあり方等に関する検討会報告書「精神保健医療福祉のさらなる改革に向けて」で、地域生活支援体制の強化としてピアサポートの普及も盛り込んだ方向性を示している。2014年には、遅々として進まぬ病床数削減および長期入院精神障害者対策として、長期入院精神障害者の地域移行に向けた具体的方策に係る検討会とりまとめも発表され、長期入院精神障害者本人に対する支援と病院の構造改革がまとめられている。

表1にあるタイトルの変遷を見ると、当事者にとっての病の意味の探索に始まり（田中 2000a, 2000b, 2002a, 2002b, 2004, 北村 2004)), それが入院体験に派生し、生活ニーズの探索へと視野が限定され（川岸ほか 2002, 片岡ほか 2003, 仲宗根 ほか2010, 岩本 2007), 地域生活の継続を前提に服薬継続（斉藤 2007), 就労（西田 2009), 年金・社会保障（青木 2011, 田中・伊達 2013), 自己変容（松田 ほか2011, 渡邊・國方 2014) が取り上げられるようになっている。長期入院の問題は、「早期」支援の検討の必要性を生み（栄・清水 2012), 地域支援の有効な手立てや要素として、セルフヘルプグループ（大江・長谷川 2012) やピア・サポート（木村 2016), そして自己開示（横山 ほか2016), エンパワメント, リカバリー概念をキーワードとした（木村 2003, 立脇ほか 2016), いわば当事者の力を支えるという視点を持った研究へ発展している。当事者の語りは、栄の研究（2014, 2016) に見るようにさらに、個人の次元にとどまらず社会変革という政治的次元のエンパワメントの可能性にまで、そのエビデンスを提供するに至っているといえる。

次に、研究論文の目的や探求レベル、認識論の変遷を、一覧表（表1）から読み取っていきたい。

田中（2000a）の論文は、先に述べた精神保健福祉の歴史的な変化も分析の視点に取り込み、生活者としての体験を当事者の立場で、個別個別に、社会的存在としての個々人の体験を歴史・時代との関連の中で捉えており、続く論文においても一貫して精神障害者の病の意味を読みとく研究を積み上げている（田中 2000b, 2002a, 2000b）。2000年前後は、先に記した河野（1996）や葛西（1999）も同様であるが、精神障害者当事者がどのように暮らしているか、どのような経験をしてきたか研究者・実践者はまだ何も知らないという現状に基づき、研究者が当事者の経験そのものに着目すること自体が、まだ稀有な情勢でもあったため、「それは何であるか？」と問いかける因子探索研究がまず着手されたということなのであろう。

田中（2000a, b）では、研究論文を研究協力者との「共同作品」、「共同制作者」と述べ、研究者との共同においてテキストが生成されていることについて言及している。「それは何か」を探索し、命名する田中（2000a）の研究では、Nさんの人生の中心的な意味を「悟りと円環の人生、または永遠の求道者」とまとめ、その後の研究では、Sさんの人生の意味を、「スティグマからの自己奪還」（田中 2000b）、Tさんの人生の意味を「自立と自己の存在の意味を求めている闘い」（田中 2002b）と名付けている。ライフヒストリー解釈において、田中（2000a）は、Nさんの自己を再構築する過程の苦しさを「この過程は、そのまま病識の獲得の過程と言い換えることもできる」と述べており、Tさんでも「価値観の転換を経由し、自立への道を歩んできた」と記し、自己意識の変革が当事者の立ち直りを強く推し進めていることを強調すると同時に、看護職側にも意識変革の必要性を求めている（田中 2002b）。田中の研究に続くのは、病の意味が創り出される過程に存在する構成要素と構造を明らかにしようとした北村（2004）の調査となる。北村（2004）は、田中の研究を「病の意味は病そのものからくる辛さに始まり、心に様々な外傷を受けながらどん底の体験を経て、仲間との出会いがターニング・ポイントになる」、「精神障害・当事者自らが“語る”ことを通して病の意味を形成すると同時に自己の歴史の再構成が行われる」とまとめている。北村（2004）も病の意味の個別性を認め、動的に捉え、その構成要素とその関係を明らかにしようとしていることが読み取れるのだが、病の中に意味を作り出す過程においては「病の受容過程」という命名もしている。憚りながら、このような使い古された用語の安直な使用は、せっかくのユニークな「語り」も色あせたものに変色させてしまう恐れ

について、指摘せざるをえない。

「それは何か？」という「知られていない」事実の発掘という探求方法は、目の目をみるとともにその役割を終える。その後の研究は、したがって、明らかにしようとしていることがすでに「ある」、「存在するもの」と認識して研究に着手し、「何が起きているのか？」という関係探索研究へと移行する。田中（2002a, b）であれば、「歴史と病の経験が個人においてどのように絡み合っているか」であり、後続の北村（2004）の研究であれば構造要素とその関係を明示することに向かっており、入院中の体験やニーズに関する調査研究（川岸ほか 2002, 片岡ほか 2003, 仲宗根ほか 2010, 岩本 2007）に至っている。

これ以降は先述したように、精神保健福祉領域の変遷に応答するように、「早期」支援、「就労」、「セルフヘルプグループ」、「ピアサポート」「自己変容」をテーマに、精神障害者当事者のデータが扱われていくこととなる。松田ほか（2011）は、精神障害者が闘病体験を語ることによって生じる、自己変容のプロセスを明らかにすることを目的に調査を行っている。考察では、当事者が闘病体験を語ることの意義を示すなかで、自己のスティグマが軽減し、当事者は精神障がい者という枠をはずして社会の中で生活していくことができるようになると述べている。さらに当事者の語りは、地域社会での精神疾患の理解の促進を促すことにつながり、社会のスティグマの軽減へ繋がり、当事者の再発リスクを減少させ、巡り巡ってさらなるスティグマの減少につながる好循環をもたらすと述べている。渡邊・國方（2014）は、「地域で生活している精神障害者で、自尊心プログラムに参加する当事者を対象に、過去、現在、未来の時間軸の中での自己概念の変容プロセスについて明らかにする」ことを目的に据え、当事者ヘインタビューを行っている。「自分という殻や膜を自ら破って成長していく心の変化」をモデル化した研究であり、自尊心プログラムの効果検証にもなっている。横山ら（2016）の調査研究は、「精神疾患を持つ人の自己開示内容に関する構成概念を質的に明らかにする」目的で行われたもので、関係探索研究ではあるが、当事者の自己開示を内容別に測定するための尺度開発を志向するものであり、やがては関連検証研究を期待させる報告となっている。

精神障害者当事者のデータは、リカバリー概念が輸入され、社会保障が展開するに従い、「もし、…すれば、何が起ころうか？」という関連検証研究においても採用されていくようになる。木村（2003）は、日本の当事者のナラティブとリカバリーの要素の類似性を検証する報告を早い時期から行っている。青木（2011）は、「障害年金を受給しやすい社会のあり方」を明らかにするためインタビュー調査を行っていた。

関連検証研究は、栄の研究（2014, 2016）では、当事者の語りが一定の教育的効果を持ち得たグループAの福祉教育実践の実証研究をベースに、その当事者が中学生に向けて生成した語りの内容とその語りが生成される条件を明らかにする研究を行い（栄2014）、続いて、精神障害当事者の語り部グループ「ぴあの」の「卒業生」へのインタビューから「ぴあの」の活動における課題の析出とともに、語りの活動が持つ政治的次元のエンパワメントの可能性を提示する研究を行っている（栄2016）。栄は、当事者の公共の場における語りを類型化し「リカバリーの物語普及型」、「語りの活動模索型」、「ありのままの物語普及型」、「語りの活動発展型」という命名をしている。考察では、定型化されたモデルストーリーをより精巧にする営みのなかで、「リカバリーの物語普及型」と「ありのまま物語」との齟齬を感じる当事者の語りを取り上げ、そこからどう展開したのか記述し、目指す道を検討している。

これら栄の一連の研究は、社会変革につながる変化が起きているときは、何が起きているの

かという「関連検証研究」ではあるが、「…を起こすには、私はどうするか？」という「規定検証研究」につながる研究ともいえるだろう。

以上を総括し、批判的な検討を以下に述べる。

当事者のデータを収集する研究は、「これは何か？」という素朴な問いから始まりながら（因子探索研究）、事実の集積を待たずに、聞きたいことを聞く研究へ傾斜し（関係探索研究）、研究者や社会が望む仮説の検証に向けて動いてきたといえるだろう。この傾向は、よほど研究協力者との関係を丁寧維持していかなければ、研究者側の関心で設定されたテーマに収まるようにデータが解釈され、程のいい仮説にあうようデータが集められているかのように伝わってしまいかねない。いわば略奪や搾取と紙一重の行為ともなり得ることをまず、第一に指摘しておきたい。

第2に、精神障害者が地域で暮らし続ける物語のモデルストーリーが共通して見出されてくることへの疑念である。モデルストーリーとは、受苦から紆余曲折の末に価値の大転換を経由して障害を受容していき、主体を取り戻し自分らしく自立してゆく道、またはリカバリーへの道をたどるというものである。さらに、このモデルストーリーは、影響を与える他者の存在とともに綴られており、社会のスティグマへの軽減に繋がっていくという意味が付与されている。

定型化したモデルストーリーへの批判は、栄（2016）が、当事者の語り部の「現任者研修」で物語を検討する過程で、定型化した語りへの同調圧力に抗し、「語り部」を卒業した2人が創出した「公共の語り」の活動の志向を分析している報告において明示化されている。あくまでも語り部としての「公共の語り」を志向するときの分析であることを、前提に考えておかねばならないが、当事者である語り部が同調圧力や胡散臭さを感じ、「ありのままの物語普及型」、「語りの活動発展型」を創出しているように、先行研究の蓄積が結果として示してきた、モデルストーリーは、自分らしくとは言っても結局は社会にとって受け入れ可能な融和路線といえる。地域で暮らし続けていくためには、障害受容とか病識といった（言葉を他に変えたとしても）社会の条件付き承認が前提になることを支持していると言わざるを得ない。

障害者権利条約の前文には、「多様さを認め」とある。しかし、当事者の物語がモデルストーリー化されて伝わっていくことは、多様さを認め難くさせ、包摂どころか、条件を満たさないものの排除を招きかねない。社会の中にあっては、条件付承認のみであることを強化する装置としてしか機能しない恐れを持つといえる。質的データを収集し分析することの強みは、むしろオルタナティブな発見にある。支援者の関わりを根底から揺るがすような発見にある。

精神障害者当事者を対象とする質的な研究は、今一度、「多様性を認める」という原点に立ち戻り、存在するとみなしてきたものを今一度問い返していくような、事実の集積を行い、「これは何か？」と素朴に問い、発見していく作業に戻ることが求められていると筆者は考える。

4. 拙著の批判的検討と近年において注目すべき研究の動向

ここでは、前述の論文検索では検討されなかった文献と、近年において注目を浴び進化し続ける当事者研究について検討を行う。

まず最初に、拙著「青年期精神障害者のケアリング」を取り上げる。

本書に記された研究は、病気・障害を抱えながら生きていく、生き抜いていく精神障害者が自らの体験を再構成していく過程に焦点をあて、自己存在の確かさ感（self awareness）が育ち成長していくプロセスに着目し、そのケアリング過程の探求を目指す仮説生成型研究となっている。前述の検討に習うならば、「因子探索研究」であり「生成」という認識論に立つ研究に位置づく。

調査研究の概要について以下に紹介する。調査では、精神科デイケア利用者5名を研究協力者に、退所時期と退所2年～4年後の2回インタビューを施行し、インタビューデータは当事者のnarrationとして加工し質的分析を行っている。分析では、1回目と2回目のnarrationの変化は、青年期精神障害者の自己の体験構造の綴り方の変化として〈共存〉、〈和解〉、〈悪循環〉、〈所有〉、〈日常化〉の軌跡として5人5様に示された。さらにnarrationの分析を通して自己の体験構造の綴り方（récit）には、7つのパターン—〈おさまらない〉、〈帳消しにする〉、〈あずける〉、〈わりあてていく〉、〈共存する〉、〈綴りなおす〉、〈添える〉—が見出されその特徴が明らかにされていた。これらは自己の体験のおさまり具合の質を表し、その構成は変化しつづける自己の輪郭形成の過程であり自己存在の確かさ感（self awareness）の生成過程を表すものであった。総合考察では、精神障害を生き抜いていく過程において、障害受容を意味する〈和解〉の軌跡のほか、本研究の新たな知見として、〈共存〉、〈所有〉、〈日常化〉というおさまりをつけた対処の軌跡が見出され、障害受容のみを唯一のゴールとして導くケアではなく、どのような対処を選択し、いまの自己におさまりをつけようとしているのかを知ること、精神障害者のnarrationに添うということがケアにおいて重要であると論じた。さらに〈悪循環〉の軌跡が示したように、病気がきれいさっぱりなくなることがないのと同様に、終わることなく続く軌跡があることを示した。

精神障害者へのケアリングとは、narrationに添うという応答的な関係において、見えない精神障害に見えるものとして言葉化し、筋書きをつくる作業であり、それそのものが人とのつながりをつくり、対処努力を導き、有力化（empowerment）を支え、自己の成長を助けるケアリングとなり、主体的に人生を「生き抜いて」いく意味を与えるというのが総合考察における結論である。

拙著を顧みると、障害受容に向かうモデルストーリーへの反駁から、オルタナティブな軌跡として〈共存〉、〈所有〉、〈日常化〉、〈悪循環〉という軌跡を見出したが、精神障害者へのケアリングを論じるにあたり、エンパワメントを得て自己の成長に向かって主体的に人生を「生き抜いて」いくモデルを価値づけ、前提としていたことは否めない。動きを捉えるために、自己の体験構造の綴り方（récit）のカテゴリを見出し命名したが、これでは要素還元主義だと批判されても致し方ない。また、変化し続け終わることなく続く軌跡を述べたにせよ、先に述べたように、多様性の承認ではなく、条件付きの範疇におさまったもののみの承認、つまり多様さを認め難くさせ、包摂どころか、条件を満たさないものの排除を招きかねないという批判に耐える研究とは残念ながら言えない。環境との関係性を視野にいれていないからである。

拙著の出版後、精神科医療は統合失調症の軽症化をあげ、診断基準の改訂もあり、発達障害、双極性障害、認知症という枠組みからの支援の検討が始まってきている。3障害を一体化させた障害者総合支援法の施行は、様々な問題をはらみつつも、地域の暮らしを支える資源を体系化し、障害者の働く場を多様な形で提供している。一方で、山崎ら（2012）のピニエット方式による心の病を持つ人に対する意識調査では、病名の推定一致率が、うつ病が65%、統合失調症17%と大きな差となって現れている。また、統合失調症想定事例に対して「うつ病」と推

定した人が47%ともなった結果を受け、「うつ病」の認知度に対して、統合失調症への関心や知識が乏しい状況であることが指摘されている。さらに、長期的な個人的な親密な社会的距離になると、うつ病より統合失調症想定事例に対して拒否感が強いという結果も報告されている。統合失調症は、未だよく知られていない疾患であり、厳しいまなざしが残存しているということなのである。

こうした地域の暮らし、社会環境の変化と残存する厳しいまなざしが報告されるなかで、精神障害者当事者の経験もより多様化している可能性は十分にあると考えられる。少なくとも、多様さを認め合う社会の創出を考えたときには、やはりモデルストーリーから脱却したオルタナティブなストーリー、事実の集積が新たに求められているといえよう。

オルタナティブなストーリーの集積ということで、近年注目すべき研究動向として、真っ先に上がるのが、「当事者研究」であろう。「当事者研究」は北海道浦河町にある「べてるの家」がその発祥の地であるが、多くの当事者・実践者・研究者がその取り組みに関心を持ち広がりを見せている。

発達障害当事者研究を実践する綾屋（2010）は、べてるの家の「当事者研究」との出会いを記すなかで、「自分のおかしさの原因探し」をしていたとき、精神医学や心理学で語られる症状をひとつとおり読んで、統合失調症だけが実感として伝わってこなかったと述べている。そして自分の延長線上において内側から実感としてわかることができたのは、「べてるの家の「当事者研究」（医学書院 2005年）」だったというのである。

綾屋が読破した文献がどれであったのかはわからないが、拙著も含め、先に検討した精神障害者当事者の経験に着目した論文は、自分と地続きにある人として読み手へ伝えるという役割は果たしていなかったのかもしれない。「自分の場合は？」と類推する転用可能性を果たせず、応答責任を果たしていなかった可能性があるのだ。精神障害者当事者の生きた言葉を得ていたはずなのに、「内側からわかる気がする（綾屋2010）」産物にはなっていなかったのかもしれないのである。

杉田（2017）は熊谷との対談の中で、マイノリティーとマジョリティーの間をつなぐ言葉を編んでいく当事者研究の意義を述べている。杉田は、一つの当事者性からの主張は、今、誰にだって苦労はあると受け取られてしまったときに主張がしにくくなっているという。これは、筆者が長年、大学の授業で精神障害者当事者の講演を企画し続けてきたなかでも、最近の変化として、肌で感じるものである。つまり多様化した社会の中で価値観のすべてが相対化されていき、圧倒的なマジョリティーが縮小し、多様な価値が混在するようになると、同時に無関心と想像力の欠如が生まれ、精神障害という当事者性だけで主張すると、「誰も苦労しながら生きているのだから、甘えるな」という感想がごく少数だが出てくるのだ。これでは、当事者が手記を出版し、体験を語ったところで批判の対象にしかなり得なくなってしまう。多様化が自ずと多様性を認めあう環境を導く訳ではないのだ。対談の相手である熊谷（2017）は、「当事者にとっての「環境」たる健常者が当事者研究をやることで初めて、当事者が社会モデルに矛盾しないものになる」と述べている。当事者研究とは、健常者もまた当事者としての綴りを得る中で捉え直しが生じるということであると、現時点で筆者は理解している。

先に事実の集積が望まれていると述べたが、その方法論と提示方法は2000年当初のアプローチを超えた工夫が、今、求められる社会状況になっているのではないだろうか。

近年において注目すべき研究の動向において、この課題に向かうヒントとなるのは、中井久夫と

考える患者シリーズ1・2・3」という副題がつけられている、三部作「統合失調症をたどる」・「統合失調症をなぞる」・「統合失調症は癒える」の三冊である。本書の構成は実にユニークである。松田（2017）が学会誌である臨床教育学研究に記した「統合失調症をたどる」の書評「概念をケアし、ケアされるということ」の一部を以下に抜粋する。

本書は、幾重にも折り重なる対話が下地として存在している。デイケアという場で出会った精神科医森越まや氏と患者の方々、患者の方々ともに設立したラグーナ出版の場で紡がれていったであろう構成員同士の対話、そして監修・解説を務める精神科医中井久夫氏と森越まや氏、「考える患者」との対話、である。おそらく他にもあるに違いない。こうした様々な「声」がこだまし呼応し響き合っているような読後感を与えてくれる本である。

（中略）

構成は実にユニークである。冒頭の「本書ができるまで」において記されているが、「精神科医中井久夫先生の著作を、患者と医療者がともに読み、新しい統合失調症像を作り出していく試み」となっており、構成は3部に大別される。第1章では、中井氏による一般読者向けに記された統合失調症の経過が記されている。それを受け、第2章では「考える患者」各々の経験が記され、第3章で統合失調症の経過別に、中井氏の著作の抜粋<テキスト>、呼応する「考える患者」の経験<体験ノート>、さらにそれに応答する中井氏と森越氏の対話形式の<解説>が展開している。こうしたさまざまに織りなされる対話による共同作業を、中井氏は「患者さんからのお墨付きをもらえるんだね」と言って応じていたということも、本書に惹きつけられる所以である。

（中略）

メイヤロフ（1971）は、On caring（ケアの本質）という著書の中で、ケアの対象は、人だけでなく、芸術や概念をも含むことを記している。メイヤロフは、ケアとは相手を大切に思い成長への助力をすることであると述べ、ケアの担い手は、ケアの受け手が、自分で自分をケアし、さらに他の誰かをケアできるように、助力すると述べている。ケアの受け手を、生きている概念とするならば、その概念を熟成させたり、新たに作り変えたり、思考の道具として活かそうとした、本書の試みは、まさに統合失調症という概念をケアしていると言い換えられるだろう。森越氏は、中井氏の統合失調症の論考に励まされ、希望を見ながら診療にあたっていたことを記している。概念が、他の誰かをケアしているという一つの物語である。「考える患者」もまた統合失調症という概念をケアしながら、ケアされてもいくような互惠性のプロセスが本書から伝わってくる。本を読み砕いていった「考える患者」の皆さんの<体験ノート>から、「お墨付き」をもらう中井氏は、自分がケアした概念に巡り巡ってケアされているかのようでもある。

概念をケアし、ケアされるということ。概念をトップダウンに見下ろして、事象に当てはめ説明がつくことに満足するのではなく、思考の道具として奪い返し、捉え直し、実践者・研究者と当事者とが協働して対話を続けるということ。ケアという営みにある受動と能動がごちゃごちゃした関係の中での互惠性や幾重に広がる対話こそ、本学会が大事にしているところであると評者は理解している。

「概念を思考の道具として奪い返す（中井 2015）」ということ、研究成果が他のだれかをケア

できるように研究をケアするということが、そこには自身をケアするマイノリティーの多様性に触れ、研究者の側に生じた捉え直しをも記し自身をケアしながら（＝当事者研究でもある）、マジョリティをもケアできる言葉で綴りなおしていく往復書簡というようなケアリングの視点を取り入れることが、中井久夫と考える患者シリーズから受けた教示である。

これこそが、関心を持つ人に延長線上にある他者として感じられる言葉になることを期待できるだろうし、研究をケアするという視点こそが、研究協力者が「協力したい」とか「協力してよかった」と心から思える質的研究に向けた構想にも叶うのでは、と今、考えている。

5. 当事者の経験に着目した質的研究を再構築するために

ここまでで、精神障害当事者の経験に着目した質的な研究は、今一度、「多様性を認める」という原点に立ち戻り、事実の集積を行い、「これは何か？」と素朴に謙虚に問い、発見し命名していく作業に立ち戻ることが求められていると筆者は第一に述べたい。さらに、第2の観点として、研究にケアリングの視点を取り入れることを上げたい。

本節では、ここまでとは趣を変え、こうした質的研究を再構築するために試行してきた、ここ2－3年の筆者の「障害者臨床心理学」ゼミにおける論文指導の試みを紹介し、「障害者臨床心理学」の着想と展望を述べる。

「障害者臨床心理学」は、2015年度に開設し、現在に至るまでに修士論文2本、卒業論文4本を指導してきた。年代別論文題目一覧を表2に示す。

表2. 「障害者臨床心理学」卒業論文・修士論文題目一覧

年度	論文題目
2015	支援するひとは、「かわり」の中で何を求めているのか：ある療育者との語り合いから
2016	身体障害者が感じる心理的不自由さはどのようにして生み出されるのか 不登校後において「不登校経験者」になるとは
	聴者は「ろう者になじむ臨床」をいかに実践するか：手話通訳者の語りから
2017	「障害理解」はいかにして生じ、変容するのか：子ども達の「みんなで楽しむ」福祉授業実践から 統合失調症を抱える親をもつ子どもがどのように困難を乗り越え生き抜いてきたのか

研究テーマは、本人が見つけ出してくるものであり、指導教員が与えるものではない。表2のテーマをみればわかるように、フィールドは多方面にわたっている。

研究に登場した当事者は、療育現場における支援者、学齢期に登校していない期間を有する青年たち、身体障害者、小学生、手話通訳者、統合失調症を抱える親をもつ子どもと様々である。手法は手記や当事者の著作を検討する文献研究もあれば、インタビューや参与観察によるデータ収集もある。

論文指導を通して重視しているのは、「問い」と「発見」と「命名」である。

「問い」を突き詰めていく作業は、研究計画立案過程においても相当数の時間をかける。真実は、そこにあるものとしてとらえるのではなく、動的なもの、生成されるものとして捉えるという認識のもと、「仮説」ではなく、徹底して「問い」の探求とその言葉化を試行錯誤する。「対人

援助者が生きていくなかで、他者との「かわり」はどのように在り、そこから何が得られているのだろうか？（飯田 2015）」、「いつも「不登校経験者」として生きているのだろうか？（高橋 2016）」、「心理的不自由？」、「障害理解って？（砂金 2017）」、「ろう者になじむ臨床って？（得地 2017）」、「精神障害のある親を持つ子どもの経験って？」である。

「問い」が確かなものになっていけば、研究目的や方法は自ずと導かれていく。研究データの収集においては、現実的な課題こそクリアせねばならないが、バリエーションはいくらかあるものである。大事なものは、データに謙虚に触れることで己のなかに生じる「発見」であり、先入観を潔く捨て「命名」をすることである。研究者が客観的で正確なデータ収集マシンになる必要はない。己を晒し、どんな測定器でデータを収集しているかという意味で自己開示をし、わかったつもりを疑いながら、己のなかに生じた新たな理解や発見の過程を記すことこそを、筆者は期待する。

学生が見出した「発見」は、ユニークな言葉で「命名」されていく。もちろん、謙虚さと慎重さゆえに安直な言葉化を控える場合もある。

具体的には、「＜得られる＞ではなく＜与えられあう＞（飯田 2015）」、「相互作用の中の「不登校経験者」（高橋 2016）」、心理的不自由ではなく「イメージのもつれ」、「対処」ではなくて「もがき」、「ろう者になじむ臨床」ではなくて「聴者がろう者とのように出会い、関わったのか」から問い直す」（得地 2017）、という表現になっていたり、「障害理解」という概念を「みんなで楽しむ」授業実践から捉え直す（砂金 2017）論考が展開する論文になっていった。

「発見」の過程に付き合うことは、筆者にとってことのほか楽しく創造的な営みとなる。

おかげさまで、筆者のライフワークとなっている、地域にすむ精神障害者へのケアに関する研究もまた恩恵を受け、影響を受けてきた。

本節の締めくくりとして、筆者の今後の研究課題を述べる。

「問い」の起点は20年以上前から変わることなく、「精神障害を生き抜くとはいかなることか」である。精神障害を抱える当事者が、地域で己の人生を生き抜こうとするその道のりから学び、周囲の人々・当事者、それぞれの立場にとっての課題と展望を見出したいと考えている。「問い」には、当事者が精神障害を生き抜いているという認識を根本から問い直すことを含んでいる。「精神障害者の生き方」は果たしてあるのだろうか？当事者は精神障害を意識せずに生きていることだってあるのでは？という問いを挟んだ時、前提となる認識は覆さねばならないだろう。この問いの背景として、精神保健福祉環境の変化も踏まえておかねばならない。図（精神障害を生き抜くとは？）と地（環境の変化）の関係として全体をとらえる必要があるからである。これから実施する予定のインタビューと分析で留意しておくことは、モデルストーリーではない個々の物語のユニークさを大切に、己の中から湧き出る疑問や実感を正直に綴ったテキストを作成し、謙虚に当事者に学びながら「発見」と「命名」を行いたいと考えている。

ケアリングの視点を取り入れた応答性を持つ作品を編んでいく試行が、筆者にとってのこれからの挑戦である。

さいごに

本論は、間宮正幸名誉教授の退職記念号として編集、発行される紀要に掲載される論文である。さいごに記すこととなってしまったが、筆者は、特殊教育・臨床心理学研究グループに3年間大学院生として所属し、教育臨床心理学研究グループに助手として採用され、いま、障害者臨床心理学ゼミという看板を背負っている。特殊教育・臨床心理学研究グループは言わば筆者にとっては実家であり、教育臨床心理学研究グループという最初の職場で研鑽を重ね、ようやく自立が叶い、現在、障害者臨床心理学ゼミという看板を背負うという道を歩んできた。

このなかで、「問い」と「発見」と「命名」という研究の楽しさに気づくことができたのだと思っている。これこそが、今に至る歩みのなかで得た大きな財産である。

引用文献

- 青木聖久（2011）精神障害者の暮らしと障害年金を受給しやすい社会のあり方：障害年金受給者の語りと英国におけるスティグマの解消に向けた取り組みを通して、日本福祉大学社会福祉論集125, 21-39.
- 綾屋紗月・熊谷晋一郎（2010）第4章 当事者研究の可能性. つながりの作法：同じでもなく違うでもなく，NHK出版，106.
- Donna Diers（1979）Research in nursing practice. J. B. Lippincott Company.
- 飯田奈央（2015）支援するひとは、「かわり」の中で何を得ているのか：ある療育者との語り合いから，2015年度北海道大学大学院教育学院修士論文，未刊行.
- 砂金重実（2017）「障害理解」はいかにして生じ、変容するのか：子ども達の「みんなで楽しむ」福祉授業実践から，2017年度北海道大学教育学部卒業論文，未刊行.
- 岩本操（2007）長期入院経過の精神障害者の生活ニーズに関する質的研究：当事者へのインタビュー調査からの考察，武蔵野大学人間関係学部紀要 4，25-37.
- 葛西康子（1997）精神障害者のawareness contextsと支援－精神障害者の体験に基づいた障害認識に焦点を当てた分析，北海道大学大学院教育学研究科修士論文，未刊行.
- 葛西康子・古塚孝（1999）地域に住む精神障害者の障害認識と対処努力：精神障害者の主観的体験に基づく分析，看護研究，Vol.32(2)，53-62.
- 葛西康子（2006）青年期を生きる精神障害者へのケアリング－縦断的narration分析を通して，北海道大学出版会.
- 片岡三佳・野島良子・豊田久美子（2003）精神分裂病者が語る入院体験：現象学的アプローチを用いて，日本看護研究学会雑誌 Vol.26(5)，31-44.
- 川岸洋美・市山加奈恵・中田伸代・筒口由美子（2002）精神分裂病患者の入院体験から学ぶ看護：当事者の語りを通して，富山医科薬科大学看護学会誌 Vol.4(2)，137-147.
- 河野仁志（1996）精神障害者の当事者組織の研究－患者会《すみれ会》の実地調査報告，北星学園大学大学院文学研究科社会福祉学専攻修士論文，未刊行.
- 木村真理子（2003）リカヴァリヴィジョン相互作用モデルと日本のコンシューマーナラティブの適合性，社会福祉 44，27-36.
- 木村貴大（2016）精神障害当事者がピアサポーターになる過程：A氏のライフストーリーから見出されるもの，北星学園大学大学院論集 7，1-17.

- 北村育子（2004）病いの中に意味が創り出されていく過程：精神障害・当事者の語りを通して、構成要素とその構造を明らかにする．日本精神保健看護学会誌，Vol.13(1)，34-44.
- 小島通代他訳（1984）看護研究：ケアの場で行うための方法論．日本看護協会出版会.
- 熊谷晋一郎・杉田俊介（2017）「障害者＋健常者運動」最前線－あいだをつなぐ「言葉」．現代思想2017年5月号 特集＝障害者－思想と実践，青土社.
- 松田康子（2017）書評：中井久夫監修「統合失調症をたどる」：概念をケアし、ケアされるということ．日本臨床教育学研究，Vol.5，207-209.
- 松田陽子・船越明子・羽田有紀・服部希恵・田中敦子（2011）精神障がい者が闘病体験を語るることによる自己変容のプロセスと変容に影響を与える要因．三重県立看護大学紀要 Vol.15，23-30.
- 中井久夫監修・解説（2015）統合失調症をたどる：中井久夫と考える患者シリーズ1．ラグーナ出版.
- 中井久夫・森越まや（2015）本書のはじめに：統合失調症の新たな概念をつくりだす．中井久夫監修・解説（2015）統合失調症をたどる：中井久夫と考える患者シリーズ 1，82，ラグーナ出版.
- 中井久夫監修・解説（2016）統合失調症をなぞる：中井久夫と考える患者シリーズ 2．ラグーナ出版.
- 中井久夫監修・解説（2017）統合失調症は癒える：中井久夫と考える患者シリーズ 3．ラグーナ出版.
- 仲宗根歩沙・當山富士子・田場真由美（2010）精神疾患患者が入院生活を送る上で心の支えとしているもの：当事者自身の語りから．沖縄県看護研究学会集録25，95-98.
- 西田美香（2009）精神障害者の就労と地域生活が回復に及ぼす要因：有限会社を運営する当事者に焦点をあてて．九州保健福祉大学研究紀要 Vol.10，55-65.
- 大江真人・長谷川雅美（2012）セルフヘルプグループに参加しているうつ病者の体験．日本精神保健看護学会誌，Vol.21(2)，11-20.
- 斎藤まさ子（2007）服薬継続における「自己決定の尊重」と看護：当事者の語りをとおして考える．新潟青陵大学紀要 Vol.7，17-28.
- 栄セツコ・清水由香（2012）精神障害当事者が物語る「早期」に関する一考察：前駆期における本人の違和感と援助要請行動．桃山学院大学総合研究所紀要 Vol.37(3)，91-112.
- 栄セツコ（2014）社会貢献としての病いの語り：精神障害当事者による福祉教育の「場」に着目して．Core ethics：コア・エシックス Vol.10，109-120.
- 栄セツコ（2016）精神障害当事者の語りをもたらし社会変革の可能性，コア・エシックス，Vol.12，89-101.
- 栄セツコ（2017）公共の場の語りによる精神障害当事者のエンパワメントの獲得過程とその特徴：語り部グループ「びあの」の語りの実践から．Core Ethics：コア・エシックス，Vol.13，73-85.
- 田中久子・伊達悦子（2013）中年期就業者の「こころの病い」の構図：10事例のインタビューをもとに．作大論集 3，75-88.
- 田中美恵子（2000a）ある精神障害 当事者にとっての病の意味－地域生活を送るNさんのライフヒストリーとその解釈．看護研究 Vol.33(1)，37-59.
- 田中美恵子（2000b）ある精神障害 当事者にとっての病の意味，Sさんのライフヒストリーその解釈；スティグマからの自己奪還と語り．聖路加看護学会誌 Vol.4(1)，1-19.
- 田中美恵子（2002a）ある精神障害・当事者のライフヒストリーとその解釈（第1部）地域生活を可能とした要因および個人における歴史と病いとの関係．東京女子医科大学看護学部紀要 Vol.5，1-15.
- 田中美恵子（2002b）ある精神障害・当事者のライフヒストリーとその解釈（第2部）病いの意味：自立と自己の存在の意味を求めての闘い．東京女子医科大学看護学部紀要 Vol.5，17-26.
- 立脇恵子・木村真理子・河村ちひろ（2016）リカバリーの語り：米国精神障害者家族連合会（NAMI）で活動

するスタッフ．社会福祉 57, 147-155.

山崎喜比古監修・的場智子・菊澤佐江子・坂野純子編著（2012）心の病へのまなざしとスティグマ全国意識調査．明石書店．

高橋志織（2016）不登校後において「不登校経験者」になるとは．2016年度北海道大学大学院教育学院修士論文，未刊行．

得地菜摘（2017）聴者は「ろう者になじむ臨床」をいかに実践するか：手話通訳者の語りから．2017年度北海道大学教育学部卒業論文，未刊行．

横山和樹・森元隆文・竹田里江・吉野淳一・池田望（2016）精神疾患をもつ人の自己開示内容に関する構成概念：北海道で地域生活を送る当事者を対象とした質的研究．精神障害とリハビリテーション Vol.20(2), 169-176.

渡邉久美・國方弘子（2014）地域生活をおくる精神障害者の自己概念の変容プロセス：自尊心回復グループ認知行動看護療法プログラム参加者へのインタビューから．日本看護科学会誌 Vol.34(1), 263-271.

* 卒業論文は著者の承諾が得られたものののみ記載した。

A Critical Review of a Qualitative Study on the Lived Experience of People with Mental Health Consumers/Survivors/Ex-Patients

Yasuko MATSUDA

Key Words

Mental health conditions ; Qualitative study ; Critical review

People with mental health consumers/ survivors/ ex-patients

Abstract

This paper attempts to consider current issues and future visions of a qualitative study on the lived experience of people with mental health consumers/survivors/ex-patients. Note that no difference exists between the collection of data regarding their lived experience and exploitation or plunder. Though model stories based on their lived experience, they were confined to acceptable stories in society. If lived experience explains model stories, I fear that social environment may not take diversity into account, causing not inclusion but exclusion. In future visions, I suggested that researchers should be cognizant of recognizing diversity, asking a primary research question. “what is it” in order to discover and give a name again. Another important point is that researchers attempt to adopt a caring perspective in their studies.